第44編　川が公園になったまち

スペインを二分した左派の人民戦線政府（共和国派）と、右派の反乱軍（ナショナリスト派）とが争ったスペイン内戦（1936―1939）の後、共和国政府はバレンシア[*1]を臨時の首都としたが、フランコ軍により包囲された。フランコ時代にはバルセロナにおけるカタルニア語と同様、バレンシア語による会話と教育が禁じられた。スペインが民主化された後、1982年にバレンシア州は自治州となってバレンシア語の教育が義務化され、現在では人口約80万人を擁するスペイン第三の国際都市となった。

戦後の大きな出来事の一つに、1957年市内を流れるトゥリア川[*2]が大洪水を起こしたことがある。これを機に、川の流路を市の南側

写真44-1 公園になった旧トゥリア川床

写真44-2 芸術科学都市（S. カラトラバ+F. キャンデラ設計）

*1 Valencia：バレンシア州の州都。人口約80万

*2 Río Turia

*3 La Lonja de la Ceda（1482～1548建設）

につけ変える決断が下され、その跡は7kmにわたる長大な都市公園となった（写真44-1）。そして1996年には、その一画に近未来的な建築群で目を引く芸術科学都市が作られた（写真44-2）。

一方、バレンシア市内にあるラ・ロンハ・デ・ラ・セダ[*3]（写真44-3、4）は、15世紀後半に建てられた絹の商品取引所で、当時のバレンシアの経済力を偲ばせる第一級の建築である。商業の殿堂としてゴシック様式の威容を誇るラ・ロンハは、プラサ・デル・メルカード[*4]（商業広場）にあり、ロス・サントス・フアネス教会[*5]や大きな常設のバレンシア中央市場に面している。1996年にユネスコの世界遺産に登録された。分厚い壁、塔、銃眼といった要素を纏い、古城を想起させるこの建築は、①海の領事の広間、②塔、③柱のサロン、そして④オレンジの木の中庭、の4つの主要要素で構成され、敷地面積は2、000㎡を超える。

地中海の西端に位置する政治地理的な特質に依拠するバレンシア。その都市としての豊かさの厚みは、以上のような事例からだけでも垣間見ることができる。さらに、次から次へと現れるこのまちの文化遺産を徒歩で巡りながら、やがて海辺に辿り着けば、ここがスペインの輸出の二割を担い、かつ地中海最大の水運物流基地であることを了解するのである。

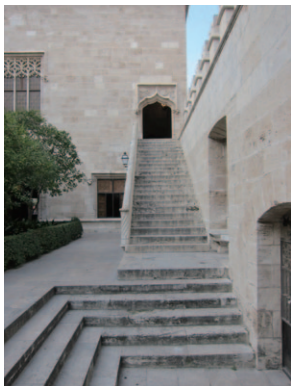
写真44-3 ラ・ロンハ中庭入口

写真44-4 ラ・ロンハ、ホール入口

*4 Plaza der Mercado

*5 Los Santos Juanes